

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.132; おわりに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2016-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00006027

おわりに

岸上 伸啓

(国立民族学博物館)

本書は、日本人による環北太平洋沿岸地域の先住民文化研究の成果の一部を紹介したものである。考古学者と言語学者、文化人類学者が寄稿したことによって学際的な著作となった。

ところで、本書を編集してみていくつか気づいた点がある。すでに45頁でも述べたが、環北太平洋沿岸地域の先住民文化研究の今後の発展のためには重要であると考えるので、最後にもう一度、強調しておきたい。

第1は、環北太平洋地域の先住民文化を研究している日本人の若手研究者の数がきわめて少ないことである。この地域を専門とする若手研究者の育成が急務であることを喚起したい。

第2に、第1の指摘と関係するが、国境に接しているという地政的な理由で1990年代と比べると調査許可の取得がふたたび困難になっているサハリン島やカムチャツカ半島、チュコトカ半島の先住民文化に関する日本人研究者の調査数が減少していることである。北東アジア地域の先住民文化研究は、現代の日本文化人類学界の未開拓研究領域といっても過言ではないと考える。重点的に現地調査を実施するべきである。

第3は、学問と研究対象の専門化が進み、個々の民族文化や言語に関する研究は深化してきた一方で、環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する研究分野では学際性や総合性、比較の視点が欠如もしくは弱体化しているといわざるを得ない。とくに最近の日本人の研究は、専門化が進んだ一方で、比較の視点が欠如している。私たちは100年以上前に実施されたジェサップ北太平洋調査プロジェクトの初心に立ち返り、地域間や民族文化間の現状や歴史に関する学際的な比較調査プロジェクトを国内外の研究者が協働して実施すべきだと考える。そのためには、情報や意見交換のための研究者ネットワークや学会を創設することが望ましいと主張したい。

2013年1月の国際シンポジウムを契機として、研究者ネットワークの形成や専門学術誌の創刊の動きが見られる。国際シンポジウムの実行委員長として、今後、日本人研究者も参加し、中心的な役割を果たす国際研究プロジェクトが実現することを切に望む次第である。

最後に本書の編集作業において国立民族学博物館の岸上研究室の生田節子さんと中村真里絵さん（外来研究員）から多大なるご助力を頂戴した。厚くお礼を申し上げる。